

『大南寔録』の成立過程(六―B)

——ルグラン・ド・ラ・リラエ師——

On the Formation of *Dai Nam Thuc Luc* (大南寔録) (VI-B) : Père Legrand de la Liraye

林 正子

Masako HAYASHI

Summary

The *Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien* (3 vols. 大南寔録正編) was printed in 1873 as a private publication. The original text was handed by a Frenchman named Lu Gia Lang (蕭嘉陵) to a Vietnamese Dui Minh Thi (惟明氏). The purpose of this article is to establish the identity of Lu Gia Lang, that he is Legrand de la Liraye, a missionary of Missions Étrangères de Paris, who later became a government official of Cochinchina from 1862 to 1873. We try to retrace his life as a “white mandarin” actively working for the construction of the colonial “Cochin China.” We also emphasize the importance of the politics of gathering documents for the administration of the new colony.

はじめに

- 一 『大南寔録正編』三巻
- 二 越南本の仏山版 —— 以上第四四号(二〇一〇—三)
- 三 大富浪沙国蘆嘉陵
- 1 ルグラン・ド・ラ・リラエ師
- 2 宣教師から白人マンダリンへ
- 3 コーチシナ総督府の蒐書
- 四 嘉定城惟明氏 —— 以下次号

三 大富浪沙国蘆嘉陵

1 ルグラン・ド・ラ・リラエ師

前稿では、『阮朝の実録と同名の書物・仏山版『大南寔録正編』三巻について紹介した。フランス人蘆嘉陵の提供した原本を、ベトナム人惟明氏が広東省仏山で刊行してコーチシナのチョロンで販売したこと、東洋文庫蔵の宝華閣版が三巻そろいの完本として「天下の孤本」であると述べた。しかし、その後の調査で初版にあたる金玉楼刊の完本が、フランスに所蔵されていることが判明した。¹⁾そこで、本稿は訂正から始めなければいけない。

フランス国立図書館マニユスクリ・オリアントー(東洋写本)部蔵のA 26『大南寔録正編』三巻は、『越南漢喃文献目録提要』が補充した海外

に在る越南本である。写本部所蔵の同書が刊本であることは、未確認であった。同書が金玉楼版であると判明した現在、仏山版『大南寔録正編』は五種となった。二種の刊本(金玉楼Ⅱフランス国立図書館および漢喃研究院蔵、宝華閣Ⅱ東洋文庫蔵)、三種の写本(漢喃研究院およびフランス国立図書館蔵)である。

本稿では、まずフランス人蘆嘉陵の同定を、漢字文化圏におけるベトナムと中国との漢字使用の異同という観点から試みる。ついで植民地コーチシナにおいて、最初の二十年間の提督総督期(一八五八—七九)に、阮朝マンダリンに代わって行政を担当した白人マンダリンの一人として蘆嘉陵の実像を描く。あわせてコーチシナ総督の蒐書政策の重要性を指摘したい。しかし、筆者の力量不足およびフランス、ベトナム双方の資料が不足するためあくまでも問題提起にとどまらざるをえない。²⁾

仏山版『皇越地輿誌』(一八七二年刊)³⁾、『大南寔録正編』(一八七三年刊)の原本は、フランス人蘆嘉陵が提供したことは、それぞれの序文に明らかである。

蘆嘉陵の同定については、すでに『東洋文庫蔵越南本書目』とチャン・ヴァン・ザップ氏は未詳とするが、H・リュシエ(張秀民氏)、ルグラン・ド・ラ・リラエ(『越南漢喃遺産書目提要』)の二説がある。

まずH・リュシエか、ルグラン・ド・ラ・リラエか、について決め手となるのは、『皇越地輿誌』(東洋文庫 X—2—52)と『大南寔録正編』(東洋文庫 X—2—10)の序に記された千支である。前者には「壬申季冬上浣」、後者には「癸酉年端陽後」とあり、「大富浪沙国官盧公」「大富

浪沙国嘉定帥府參辦蘆嘉陵」の名前が明記されている。「富浪沙」がフランスのベトナム音訳・漢字表記であることは、『書目』で後藤均平氏が指摘しているとうりである。

千支の壬申、癸酉の西暦換算は、「富浪沙」が使われた時期が一八六二年から一八八三年に限定されることから、それぞれ一八七二年、一八七三年となる。

H・リュシエ (H. Russier 一八七八—一九一八) の生年は『皇越地輿誌』刊行よりも六年後であり、仏山版の原本提供者にはなりえない。H・リュシエに同定する中国の書誌学者・張秀民氏⁽⁶⁾は私蔵する一九一一年刊の漢訳『安南初学史略』を根拠とする。『安南初学史略』の二人の著者の一人H・リュシエが「大法 文学科進士充南圻諸学堂監督 盧痴緊」と表記されていることから、『皇越地輿誌』の序文に見える「盧氏」＝盧痴緊と同定する。

しかし、『越南漢喃遺產書目提要』の『安南初学史略』の項目は、著者を「Maybon 迷朶 (Phap).... Ruxie 盧痴緊 (Phap)....」フランス語解説で Rédigé par Charles Maybon (Français), Professeur à l'École Française d'Extrême-Orient et Russier, Directeur de l'Instruction Publique en Cochinchine と記し、Ruxie の原綴は Russier でありコーチシナ公教育監督であると明記している。

張秀民氏が判断を誤ったのは、二〇〇二年当時の中国に越南本およびコーチシナ植民地に関する資料が欠乏していたためである。

リュシエには「大法」と冠せられているように、一八八三年以後、嗣

徳帝の死とともに富浪沙から法蘭西へと表記が変わり、大法という略称が普及した。これは、フランスがベトナムの自立を否定して中国基準の「法蘭西」を導入することで、主権を強調したためであった。一方、大法にたいしてベトナムは「大南」と表記された。『安南初学史略』の漢訳者としての二人のベトナム人——副榜光祿寺卿廉訪使 范文樹、拳人原丹鳳尹記補督学 阮允碩——に冠されている国号としての大南である。

「越南」は中国、フランスともに忌避した呼称である。フランスは、かつての中国と同じくベトナムの独立志向を熟知した結果、自立を意味する歴史的名称の越南ではなく大南を好しとした。フランスから見れば「大南」とは、阮朝の自称で中国の冊封体制から切れたベトナム、植民地支配を隠蔽する効果を認め採用したと言えよう。大南は大法を成立させる補助材にすぎない。大法は Phap lan tay (法蘭西) の省略であり、その音は Phu lang sa (富浪沙) に対してフランスのベトナム音訳としては不自然である。

大法、大南の合作である漢訳『安南初学史略』についての張秀民氏の批判を見よう。その内容が「フランス帝国主義の宣伝に満ちていてベトナム人を麻酔にかけるものであり、読めば腹に据えかねるし滑稽だ」と痛烈に非難している。原著は一九〇九年にフランス極東学院が刊行した Ch. Maybon, H. Russier, *Notions d'histoire d'Annam* である。漢訳が一九一一年に現れたことは、共和制中国の誕生に危機感を強めたフランスが、その影響が植民地インドシナに及ばないように、急遽フランス官製のベトナム通史を公刊したことを思わせる。

リュシエ（盧痴緊または爐痴咬）は、蘆嘉陵とは別人である。すなわち蘆嘉陵は、フランスが富浪沙であった時期の白人マンダリンであるルグラン・ド・ラ・リラエである。

『越南漢喃遺産書目提要』は、『大南寔録正編』の項目のクオックグー部分に Lu Gia Lang（蘆嘉陵）と記し、さらにフランス語部分で原綴の *Légrand de la Liraye* を載せている。

以下、ルグラン・ド・ラ・リラエの経歴をおってみよう。

2 宣教師から白人マンダリンへ

ルグラン・ド・ラ・リラエ (*Théophile Marie Légrand de la Liraye* あるいは *Liraye*)⁽⁸⁾ が、ロワール・アトランティック (*Loire-Atlantique*) 県のモーヴ・シュル・ロワール (*Mauves-sur-Loire*) の貴族の家に生まれたのは、復古王政下の一八一九年七月二十五日であった。ナントで聖職の勉強を始め、一八四一年一〇月一四日にパリ外国宣教会神学校に入学、ついで一八四三年九月二三日には司祭に任じられた。司祭ルグラン・ド・ラ・リラエ師は、同年の二月一六日に西トンキンに向けて出発した。パリ外国宣教会の教勢拡大を背景とする宣教活動は十三年間におよぶことになる。

当時のベトナム、漢字文化圏に属する阮朝は、フランスの国名の漢字表記が一定しなかったように、復古王政から第二帝政への動向について認識を欠いていた。初代皇帝嘉隆（位一八〇二—一八二〇）は、パリ外国宣教会のピニョー・ド・ベヌ師 (*Pigneau de Behaine*) の援助でベトナム

の主権を獲得できたためフランスに好意的であった。二代皇帝明命（位一八二〇—一八四一）は、中国型国家建設を進め儒学とキリスト教の並存は許されなかった。禁教、弾圧、迫害が始まった。三代皇帝紹治（位一八四一—一八四七）は、アヘン戦争で香港がイギリスの拠点となった状況下でキリスト教弾圧がヨーロッパの干渉を呼び込む危険性を認めた。しかし、勢力を拡大するパリ外国宣教会への迫害は実行された。パリ外国宣教会がフランスを代表する勢力と認めたベトナムは、迫害という武力行使で対抗した。

あたかも嗣徳帝（位一八四七—一八五三）は、紹治帝が再開したキリスト教迫害につづく大迫害を行った。一八五三年から五七年にかけて九五人の死者が生まれた。フランスにとっては九五人の殉教者となる。⁽⁹⁾

一八五三年、ルグラン・ド・ラ・リラエ師は香港で数ヶ月の療養生活を送っていた。ハノイ、ナムディン、ニンビン等で宣教したが、ラクト (*Lactho*) での過酷な勤務が、迫害妄想という被害妄想 (*Attaint de neurasthénie, sous la forme qu'on appelle maladie de la persécution*) の原因だった。かれは翌一八五四年、中国人の密輸ジャンクでトンキンに上陸したが、大迫害に直面して健康が悪化し帰国することになる。一八五六年六月、西トンキンからの帰国は、コーチナでの殉教者四人の遺体を護送する任務を負っていた。

嗣徳帝の大迫害は、フランスとの正面衝突のきっかけとなった。パリ外国宣教会のペルラン師 (*Pertin*) は一八五六年にパリに戻りナポレオン三世に出兵を要請した。一八五五年に即位したナポレオン三世は、復

古王政期に再開された海外領への関心をひきつぎ、インドシナ半島攻略のために情報収集を始めていた。¹¹翌一八五六年、フランスはクリミア戦争に勝利してイギリスとの協調はアジアでも維持されていた。英仏協同出兵の第二次アヘン戦争も勝利に終わり、フランスは一八五八年六月、講和条約に調印した。

フランス軍は中国から撤退し矛先をベトナムに向けた。中国派遣軍を率いるリゴー・ド・ジュヌイイ (Rigault de Genouilly) 提督がダナンを砲撃したのは、九月一日であった。「宣教師殺害」への復讐を共通の大義名分とするフランスとスペインの連合軍の攻撃である。翌年二月一八日にサイゴン (嘉定) を占領し、コーチシナ支配の足掛かりを得た。

サイゴン (現ホーチミン市) は、ドンナイ川とサイゴン川のデルタのサイゴン川右岸に建設されたフランス都市である。新しい都市は、嘉隆帝による南圻 (コーチシナ) 統治の中心だった嘉定城 (ザーディン Gia Dinh) と、華人の街チョロン (Cho Lon) の中間に位置する。

ルグラン・ドラ・リラエ師は、提督付の通訳官として再びベトナムに渡った。当時のフランスでは宣教師達は、もっぱら「通訳の供給源」として評価されていたのである。かれは、一八五九年から一四年間住んだサイゴンに骨を埋めた。一八七三年、サイゴン軍病院で死去すると、コーチシナ総督デュプレ (Dupre) 提督は墓誌銘に

この土地の利益のために献身し、かれは類まれな謙遜の下に輝かしい功績を秘めていた。

と記し、植民地官僚としての功績に高い評価を与えた。

かれは、西コーチシナ代牧区に属していたが、一八六一年にパリ外国宣教会を退会し、コーチシナ総督府に職を得た。宣教師から白人マンダリンへの転身は、前年の一八六〇年にトンキン、フエで起こった大迫害と関係すると思われる。大迫害は、かれにベトナムからの帰国を余儀なくさせた神経疾患をもたらした一八五〇年代の記憶を呼び覚ましたに違いない。

かれに帰国ではなく、白人マンダリンとしてのベトナム生活を選ばせる新しい状況があった。リゴー・ド・ジュヌイイ提督は、ダナン攻撃にベトナム人キリスト教徒が呼応して蜂起しフランス軍を支援することを目論んでいた。しかし、ベトナム人教徒の蜂起は起こらず、阮朝マンダリンが逃亡し地方行政は停止した。占領地支配のためにフランス軍は苦慮した。提督総督は一八六一年に原住民問題担当局を設け、若手の海軍士官を中心に原住民問題監督官¹⁴を任命し、かれらを白人マンダリンとして苦境を切り抜けていった。一八六三年、ルグラン・ドラ・リラエ師が任命されたのは、原住民問題二級監督官である。別表はかれの略歴である。

コーチシナ支配の基準は『ナポレオン法典』に求められた。ベトナムの法典がP・フィラストル (Philastre) によってフランス語訳され出版される¹⁵一方、コーチシナ総督府は通訳を含む宣伝隊を組織して『ナポレオン法典』を普及していく。¹⁶ルグラン・ドラ・リラエ師が地方方法廷と関わったことは明らかである。通訳官としてのみならず、十数年に及ぶ宣教師生活から得たベトナムの風俗習慣についての理解は、フランス支

別表 コーチシナの白人マンダリン ルグラン・ド・ラ・リラエ師 略歴

年	月	日	略歴
1819	7	25	モーヴ・シュル・ロワール（ロワール・アトランティック県）で生れる (D) ナントで司祭の勉強を始める (D)
41	10	14	バリ外国宣教会神学校に入学 (M)
43	9	23	司祭に叙任 (D)
	12	16	トンキンに出発 (D)。中国広東省、ラホで伝道。ベトナムのハノイ、ナムディン、ニンビンで勤務 (M)
53			トンキンのラクトでの過酷な勤務で被害妄想を患う。香港で療養 (M)
54			トンキンに中国人のジャンクで戻る (M)
56	6		病気が悪化して西トンキンを離れ帰国。コーチシナでの殉教者4人の遺体を選ぶ (M)
58	9	1	リゴー・ド・ジュヌイ提督の通訳官としてダナン攻撃に参加 (M)
59			サイゴン居住 (M)
61			西コーチシナ代牧区に所属 (M) バリ外国宣教会を退会 (M)
62		5	参謀部属総督府通訳官 司令部属アンナン人局局長 月俸90ピアストル (B) (サイゴン条約〔キリスト教伝道の自由 コーチシナ東部三省獲得〕)
63	4	1	参謀部中央局属原住民問題二級監督官 (B)
—	10	20	ベトナム官人ディンによる証書配布 (F)
65	1	2	潘清簡宛のP・ヴィアール提督の書簡作成 (B)
	3	20	サイゴン動物園にワニを寄贈する (B)
	6	19	農工業委員会メンバー (B)
	8	27	第一回コーチシナ博覧会準備委員会の委員に就任 (B) 『アンナン民族史稿本』(サイゴン) (M)
66	5	16	フエ派遣報告書 (M)
	8	13	レジオンドヌール・シュヴァリエ章受賞 (X)
67	5		(コーチシナ西部三省併合)
	6		フエ派遣のグランディエール総督の通訳 (M)
68			『アンナン語・フランス語基本辞典』(サイゴン) (1874 パリ) (M)
71	1	18	「コーチシナ改革についてのルグラン・ド・ラ・リラエ師の書簡」(F)
72	3	8	ルグラン・ド・ラ・リラエ師への土地無償譲渡 (F) 仏山版『皇越地輿誌』を惟明氏が出版 (壬申季冬上浣 1873年1月)
73	1		「公教育についてのリュロ、フィラストル、ルグラン・ド・ラ・リラエ師の報告」(F)
	2	18	レジオンドヌール・オフィシエ章を受賞 (X) 仏山版『大南寔録正編』を惟明氏が出版 (癸酉端陽 1873年5月)
	8	7	サイゴンの軍病院で死去 (M) デュブレ総督による墓誌銘 (D)
75			『アンナン官話における発音符号表記による漢字』(サイゴン) (M)
87	10		(フランス領インドシナ連邦成立)
97			サイゴンの街路にルグラン・ド・ラ・リラエ通と命名 (F)

出典

B J. Bouchot, *Documents pour servir à l'Histoire de Saigon, 1859 à 1865*, Saigon, Éditions Albert Portail, 1927.

D M. Prevost, R. d' Amat, H. Tribout de Morembert, *Dictionnaire de biographie française*, fasc. 119, Paris, Letouzey et Ané, 1980.

F Foire Exposition de Saigon : Pavillon de l'Histoire, la Cochinchine dans le passé. *Bulletin de la Société des Études Indochinoises* (Saigon), XVII, No. 3, 1942.

M Archives des Missions Étrangères de Paris.

X Archives Nationales, Direction scientifique de Paris, Département de l' Orientation et de la Communication.

配の円滑化に寄与したであろう。たとえば法廷での認定尋問ひとつをとっても、ベトナムの習慣では姓名を使わずに官職を称する。姓名を使うというフランス方式は馴染まず、しばしば軋轢を引き起こし裁判の進行を妨げた。¹⁷⁾

別表に見るように、かれは白人マンダリンとしての一步を参謀部属総督府通訳官として歩みだしたが、原住民問題二級監督官として地歩を固めていく。十一年間の勤務中に受けたレジオンドヌール勲章は、シユヴァリエ章からオフィシエ章へと昇級し、死去の前年には土地無償譲渡も得ている。管見のかぎりでも、かれと若手の海軍士官達は語学の師弟関係に止まらず、植民地経営についての合作があったと言える。¹⁸⁾

かれは第一代コーチシナ総督リゴード・ジュヌイイ提督と親しく、パリ外国宣教会からは「海軍に近すぎる」という批判を受けていた。一八六七年、総督グランディエール (de La Grandière) 提督が、一二〇〇万ヘクタールの土地と五〇〇万人の住民を獲得したコーチシナ西部三省を武力併合した際の通訳官は、ルグラン・ド・ラ・リラエ師であった。

併合に先立つこと二年、かれは『アンナン民族史稿本』を刊行した。その序文には「われわれの六省」とすでに明記していることは (p. 4) 注目される。一八六二年五月のサイゴン条約でフランスが東部三省 (嘉定 Gia Dinh、辺和 Bien Hoa、定祥 Dinh Tuong) を獲得し、阮朝官軍が戦闘を停止した後も反乱はつづいた。ゲリラ戦は一八七五年五月まで已まなかった。フランスにとっては一八五八年から開始される提督総督期であり、ベトナムにとっては救国反仏戦争期である。別表に見る一八六

五年のヴィアール (P. Vial) 提督のヴィンロン (Vinh Long) 総督潘清簡 (Phan Thanh Gian) 宛の書簡は、「ブンディン (Binh Dinh) 省の反徒」蜂起に抗議するものである。反乱の中心は西部三省 (永隆 Vinh Long、朱篤 Chau Doc、河仙 Ha Tien) だった。

かれは、武力行使の結果を法的に保証するために通訳官として活動したほか、一八七〇年代の「新しいコーチシナ」建設の一員として名前が現れてくる。デュプレ提督お気に入りフィラストールをはじめリュロ (Luro)、ガルニエ (F. Garnier) といった人々に伍してルグラン・ド・リラエ師は、書簡や報告の形で白人マンダリンとしての存在感を強めていった。別表にみるように、かれは農工業委員会に所属して地下資源開発のための出版や展覧会開催など啓蒙活動を推進した。リュロ、フィラストールとの共同報告書「公教育についての報告」²⁰⁾ は、パリ外国宣教会の持論である植民地教育における教育の重要性の強調を想起させる。

十年後、一八八一年にサイゴンを訪れた一フランス人は、「サイゴンはフランスの街、綺麗な街」と記し驚きを隠さず、華人の居住するチヨロソとの違いを強調する。²¹⁾ ルグラン・ド・ラ・リラエ師達の目指した「新しいコーチシナ」——フランス型植民地が実現したのである。

かれは、「新しいコーチシナ」建設に忠実な白人マンダリンとして生を全うした。レジオンドヌール・オフィシエ章はフィラストールと並ぶし、デュプレ提督の墓誌銘を得た後さらにサイゴンの街路に名前を残したのは、一八九七年のことであった。²²⁾ ルグラン・ド・ラ・リラエ通の誕生は、フランス領インドシナ連邦成立の十年後にあたっていた。それは、かれ

の名が白人マンダリンとしてフランスの公的な記憶の場に刻み込まれたという大きな意味をもつ。²³⁾

かれは、越南本をフランス植民地建設の武器とした点でも注目すべき人物である。かれの著作は、『アンナン民族史稿本』(Notes historiques de nation annamite)、『アンナン語フランス語基本辞典』(Dictionnaire élémentaire annamite-français)、『アンナン官話における発音符号表記による漢字』(Prononciation figurée des caractères chinois en Mandarin annamite)の三冊である。かれの生前に前二冊が刊行されている。その他に越南本を原本として惟明氏に提供し、仏山版『皇越地輿誌』および『大南寔録正編』が刊行された。

以下、越南本の重要性に着目し蒐集に努めた点で、かれはマンダリンを名乗る白人にふさわしいことをみよう。

『アンナン民族史稿本』²⁴⁾は古代、近代の二部構成をとり、中国、ベトナムの年代記に基づいて、古代を紀元前二二八五年から、近代を一〇世紀から始め、それぞれを三分することを序文に明記している。古代はいわゆる中国支配期(北属期)にあたり、①神話から夏殷周の三代(紀元前二二二一〜二四九)、②秦漢(紀元前二四九〜紀元二二二)、③唐の統一に至る時代(二二〇年代から九世紀末)である(p. 5)。近代は、①将軍達の中国への蜂起の勝利から丁、前黎、李、陳朝に至る(九一七〜一四〇七)、②独立を回復しダンゴアイ(Dang ngai)(トンキン)、ダンチヨク(Dang trong)(コーチンナ)の二副王をおいてからタイソン(Tay-shon 西山)戦争までの後黎朝(一四二八〜一七七四)、③阮朝の嘉隆期

から現代までである(p. 6)。

最後に、ベトナム民族は中国支配から八〜九世紀に解放され今日にいたり、古代の部族が大帝国に吸収され、統一され独立を達成し、人的資源と豊かな大地を自ら享受し、古代の限界から溢出してチャンパとカンボジアを侵略し二つの民族をほとんど完全に滅ぼしたと纏める(p. 6)。

『アンナン民族史稿本』の序文には、ベトナムに関する一六世紀以来のヨーロッパ人の記録や漢籍だけでなく、ベトナムの書物によってベトナム通史を纏めたことが述べられている。資料として「当地で見つけた漢籍とアンナン本」を使い、漢籍についてはベトナム人の熟知する二書に限っている。

中国の年代記と注釈や解説は、漢から現代まで異なる王朝の下で広範な蔵書を形成しており、我々はアンナン人が最も知っている著作に限定する。Thieu vi thong giam『小微通鑑』すなわち年代記の短縮されたもの、そしてCo van chiet nghia『古文折義』すなわち古

い時代の書簡や公文書の説明である(p. 4)。

二書は中国人の著作をベトナム人が編集したものの、越南本である。『古文折義』一三巻は『古文合選』と同一書で、武輿甫の編集で一八三九年刊の古代詩文集。『小微通鑑節要』は、裴輝碧が宋の江費『小微通鑑大全』によって著した三皇五帝から元の順宗までの史書。

『アンナン年代記』としてはDai viet su ky『大越史記』外紀五巻本紀一九巻、Le-quin-don 黎貴惇 Phu bien luc『撫辺録』、Dai viet dia daen『大越地輿』をあげる(p. 5)。そのうち『大越地輿』に対応する書物は

見当たらない。しかし、「明命期の帝国の全省地輿誌」という説明から、現存の『皇越地輿誌』と同一と定めてよい。すなわちルグラン・ド・ラ・リラエ師は、『アンナン民族史稿本』刊行の一八六六年にはすでに同書を手に入れている、全ベトナムの地誌としての重要性を認めていた。

『皇越地輿誌』はベトナム人にとっては入手困難であった。それは仏山版の惟明氏序文が

皇越地輿誌之書、世所珍藏、未易経見也。予嘗慕是書而無由及見、時幸有大富浪沙国官盧公、篤好南朝書籍、自北圻購買得之、回以示予、予一見之、以為如獲珍宝、除而閱之、愈知宜乎世之所宝而珍藏之也、仍竊想之、人同是心也、予既見而知為宝、苟再藏之、人不共知其宝也、乃請代為付梓印刷施行、則凡後有獲觀是書者、皆盧公之好心焉。

と述べて、冒頭に同書が稀覯本であると明言し普及のために仏山版を刊行した次第を明らかにしていることから、明らかだ。

ルグラン・ド・ラ・リラエ師は、序文で一七世紀の宣教師達による報告書『信仰の伝道年報』(les *Annales de la Propagation de la Foi*)の重要性を指摘し、マルコ・ポーロから一七九三年のJ・バロウ (Barrow) までの航海者や宣教師の著作を列挙する(9. 3)。しかし、かれは資料批判を行い、中国資料のみならずベトナム資料を使い、時代区分によってベトナムの発展を中国との関係で明らかにした。さらに独立後は、南進したベトナム民族がチャンパ、カンボジアを侵略した事実を指摘している(9. 6)。ルグラン・ド・ラ・リラエ師のベトナム通史は、パリ外国宣教

会所蔵資料を超えて、現地で発掘した越南本によって書かれたことは、明らかだ。その叙述は、現代ベトナムの北属期・独立期と分け、中国からの独立を強調し、けっして中国化しなかったベトナム、五代の十一国目にならなかったベトナム民族の自立性の主張と重なる。²⁵⁾

一方、序文は「一八五八年八月〜九月のツーロン(ダナン)遠征が」が「世界で最も知られていない民族を明るみに出した」と述べて(9. 1)フランスの功績から始まっている。J・バロウの著書にふれた後、アンナン、トンキン、さらにコーチシナへと話を進め、G・オーバレ(Aubaret) 訳の *Gia-dinh-thong-chi* 『嘉定通志』(Histoire et Description de la Basse Cochinchine)²⁶⁾ をこりあげる(9. 4)。同書が「アンナン人介入以降のカンボジアの詳細な歴史」であり「我々の六省の資源についてたいへん興味深い多くの詳報」を載せることを指摘する。前述のように一八六六年、かれにとっては「六省」はすでにフランスのものであった。

3 コーチシナ総督の蒐書政策

白人マンダリンとしてのルグラン・ド・ラ・リラエ師は、通訳官、行政官として有能であり、法廷での翻訳官としての役割も果たした。²⁷⁾ かつて嘉隆帝に仕えたピニョー師は宣教師・外交官・將軍を兼ねたとすれば、かれは宣教師・白人マンダリン・ベトナム研究者を兼ねたといえよう。かれには二冊の語学書があり、辞書 (*Dictionnaire élémentaire Annamite-Français*) はサイゴンで刊行後パリで再刊され、宣教師編纂の辞書として現在のベトナムでも評価が高い。²⁸⁾

かれが越南本を捜し求め稀観書の入手に努めたのは、『皇越地輿誌』の序文にあるように「ベトナム（南朝）の書籍を好む」という個人的な嗜好だったのだろうか。かれの活動はあくまで提督総督期の白人マンダリンであるからには、越南本との関わりはたんに「ベトナム研究者」という個人的なものとは断定することは困難と考える。

提督総督期のフランスはベトナムから見れば、「漢字文化圏に介入してきた蛮人」に過ぎなかった。前掲のフランスの国名の漢字表記すら一定せずにいた時期から、フランス基準の「大法」へと固定された経緯は、植民地化の進行を伝えて余りある。初期の救国反仏闘争の核心は、文紳（ヴァンタン）がよりどころとする儒学であった。漢字はベトナムでは字儒と呼ばれたように儒学と不可分の表記法である。フランスは、漢字をクオックグーに換え、ベトナム固有の法を『ナポレオン法典』に換えた。儒学はキリスト教に屈しなければならなかった。

サイゴンの中心には大聖堂、総督府がそびえる。「新しいコーチナ」フランス型植民地の完成と維持とは、ベトナム民族精神、文化の圧殺があつてはじめて保障される。そのためにはベトナム研究は欠かせない。ベトナム人は漢字文化圏の住人であった。しかし、漢字そのものはフランス人にとって異次元の文字 (hieroglyphes) である。そして伝統中国の律令情報は、ベトナム独自の法の理解を阻む。すでに紀元一世紀のハイパー・チュン（徴側、徴式姉妹）の反乱は、漢帝国に「現地法の尊重」を教えた。⁽²⁹⁾ 周知のように黎朝の法は女子の権利を大幅に認めていた。「王法はラン（村）の垣根を越えず」という諺は、フランス植民地下でも健

在であった。⁽³⁰⁾

コーチナ総督府の白人マンダリンが直面した困難は、日本の台湾統治と比べると明らかである。

日清戦争で台湾を獲得した日本は漢字文化圏に属していた。江戸時代には朱子学が幕府の官学であり、律令研究も進み、漢詩文をものする日本型文人も現れた。儒学や漢詩文は明治期になっても、知識人の教養でありつづけた。そこで植民地台湾の漢族にたいしては漢籍から編集した『清国行政法』、現地文書による『台湾私法』で統治を進め、郷紳には漢詩文を通して懐柔が図られた。住民の大多数は漢族であり、少数の原住民族（オーストロネシア語族）には漢族移民との対立抗争、敗退という歴史的経緯をふまえ日本語を共通語として抱き込み政策が進められた。漢族、原住民族にたいする植民地征服戦争は十年間つづいたが、豪紳は大陸の原籍に去り、抗日統一戦線は組まれなかった。台湾総督府は、中国語、漢文を奪ったが漢字は残し、初等教育を通じて日本語の普及を達成した。日本語の普及は漢族の民族精神を押しさえ込んでいく。

さて、フランス人にはベトナム情報源、他方ベトナム人には抵抗の砦である越南本にたいしてコーチナ総督は無策だったのだろうか。

提督総督期の政策の一つに書物問題があつたことは、確かである。一九三一年のバリ国際植民地博覧会の公式刊行物『インドシナ』⁽³¹⁾には、注目すべき記事がある。一九四一年に刊行された日本語版には

交趾支那統治の提督達は、いづれも緊要重大な大問題を持ちながら、図書館の問題を等閑視しなかつた。彼等は着任直後に西貢に書籍の

蒐集を行つた。それは行政上に必要な資料と同時に智的生活に缺くべからざる源泉を提供すべく選ばれたものである。

と訳されている。簡単な記述であるが、コーチシナ総督が植民地統治に際してサイゴンで蔵書（「図書館」）の必要性を熟知して蒐書を開始し継続したことは分かる。その目的はふたつで、一番目の「行政上に必要な資料」としての蔵書とは、行政マニュアルとなる法律、歴史、地誌などの越南本をさし、マンダリンとしてのフランス人植民地官僚のためである。

あたかも『台湾私法』作成の目的が、土地をめぐる不動産金融体系の創出、租税制度の確立にあつたのと同じであろう。

しかし、二番目の「智的生活に缺くべからざる源泉」の蔵書とは誰のための、どのような書物を指すのだろうか。サイゴンで蒐書されたからには、越南本が対象であろう。当時、フランス人が楽しめるような古典あるいは娯楽用のフランス語書物が現地に在ったとは思えない。

「智的生活」の主語がフランス人でないとすると、誰なのか。疑問の解決のため原文にあたろう。

Les amiraux gouverneurs de la Cochinchine n'avaient pas négligé, parmi tant de graves et importantes préoccupations, la questions des bibliothèques. Dès leur arrivée, ils avaient fait rassembler à Saigon, à côté de leurs services, des collections judiciairement choisies, où le souci d'apporter des documents à l'administration s'alliait à celui de fournir à leurs collaborateurs les ressources

indispensable à la vie intellectuelle. (下線は筆者)

一見して気づくのは、「智的生活」の主語として collaborateurs という単語があることだ。訳文で削られた単語は、本来は「協力者」を意味する。第二次世界大戦でのドイツ軍占領下に「敵国ドイツに協力した人々」という用法が加わり、現在は「占領敵国への協力者」という意味も持つ。原文は一九三一年のものだが、この単語は文脈から「協力者」という漠然とした意味合いではなく、「親仏ベトナム人」と理解するほうが自然だろう。「智的生活の源泉」を越南本に求める「協力者」とは親仏ベトナム人を指すといえよう。

この解釈は越南本の歴史からみても妥当である。すなわちベトナムは「文献の邦」を自称するが、中国の侵略や内乱による多くの書厄、刊本よりも写本が多い、印刷業の偏在などの原因で越南本の伝存が多くないことは、周知の事実である。⁴⁵⁾とすると文紳と呼ばれる阮朝の知識人が一九世紀後半に実見できた書物は限られている。その証左が惟明氏である。かれは『皇越地輿誌』を渴望していた。

提督総督に始まるフランスの蒐書は、フランス極東学院によるいっそう学術的、組織的な段階をへてアジア・太平洋戦争、インドシナ戦争、ベトナム戦争を乗り越え、幾多の曲折をへて現在は、ハノイの漢喃研究院に収められて公開されている。⁴⁶⁾

以上のように、ルグラン・ド・ラ・リラエ師が惟明氏に越南本を提供した背景には、コーチシナ総督の蒐書政策があった。それは白人マンダリンのみならず、植民地行政の手足として不可欠な親仏のベトナム人に

行政マニユアルおよび教養を提供する目的をもっていった。蒐書は、「新しいコーチシナ」建設の資材のひとつであった。それは、ベトナムの民族精神保存の形を借りて、かえって扼殺を図る意図からでたものではなかったか。

一九世紀後半の漢字文化圏のベトナム阮朝に侵略したフランスは、越南国に「富浪沙」と呼ばれた。提督総督の支配下の二十年でコーチシナ直轄植民地を確立すると、自らを「法蘭西」さらに「大法」と命名してベトナムの呼称を「アンナン」もしくは「大南」と変えた。その過程でパリ外国宣教会出身の通訳官、原住民問題監督官ルグラン・ド・ラ・リラエ師は、白人マンダリンとして活躍した。仏山版『大南寔録正編』序文にみえるかれの肩書き「大富浪沙国嘉定帥府参辦官」の「参辦」は、ベトナム語—中国語辞書『越漢辞典』（商務印書館 一九九七）には「Tham bien 省長 フランス植民地下のベトナム南部各省が設けた地方官吏」と説明されている。

仏山版の二冊はルグラン・ド・ラ・リラエ師の死と前後して出版された。『皇越地輿誌』は、かれが『アンナン民族史稿本』の資料として明記している。『大南寔録正編』の抄本には「嘉隆実録」と題された一本があり、蘆嘉陵の序文をもつ。『皇越地輿誌』の入手と刊行との時差、『大南寔録正編』の原名は「嘉隆実録」なのか、についての説明はベトナム人惟明氏の同定が不可欠である。

コーチシナ総督府原住民問題監督官は、白人マンダリンとして「新しいコーチシナ」を建設した。それはベトナムにとっては「大法」に承認

された「大南」にすぎなかった。あたかも一九三一年のパリ国際植民地博覧会会場に屹立したアンコール・ワットが、クメール民族の精神を奪われフランス式に改変された歪んだカンボジア³⁷⁾であったように。

独立と統一を果たしたベトナムが、一九七五年にホーチミン市（旧サイゴン）のルグラン・ド・ラ・リラエ通を、ディエンビエンフー通と改めて名づけたのは、歪んだベトナムとしての「大南」アンナン、その後ろ盾としての「大法」フランスの峻拒である。

（本稿ではクオックグーの補助記号を省いている）

注

(1) フランス国立図書館東洋写本部所蔵A26が刊本であることを確認できたのは、P・ラングレ先生と彌永信美先生の「尽力に負っている」。

(2) 本稿作成にあたりパリ第七（ドニ・デイドロ）大学名誉教授P・ラングレ（Philippe Langlet）先生、フランス極東学院東京支部彌永信美先生、日仏会館司書清水裕子氏、法政大学図書館司書の方々、Archives des Missions Étrangères de Paris, Archives Nationales, Direction scientifique de Paris, Département de l'Orientation et de la Communication, Musée National de la Légion d'Honneur et des ordres de chevalerie から懇切な示教をいただいた。この「好意にたいし」特に記して衷心からの御礼を申し上げる。蘆嘉陵のさらなる究明に不可欠なフランス側資料（Missions Étrangères de Paris および Centre des Archives d'Outre-mer [Aix-en-Provence]）の使用は筆者の能力をこえるため、余人に委ねたい。

(3) 仏山版については、復旦大学教授陳正宏氏が「域外漢籍域内刊」の一例とし

て中国国家図書館蔵『皇越地輿誌』をあげ、中国の「代刻本」について考察している。同書の封面の図版には、中央に「皇越地輿誌」、中央上部に横書きで「歳在壬申年新鐫」、右に「明命十四年著 一在提岸和源盛發客」、左に「粵東 仏山 福祿大街 金玉樓藏板」と見える。これは、前稿の「別表 仏山版一覽表」掲載の（1. 皇越地輿誌）と一致する。陳正宏氏は、仏山版と並べて「維新丁未元年」「觀文堂藏板」と明記された別本（越南刊本）の封面も掲載している（『越南漢籍裏の中国代刻本』関西大学文化交流学教育研究中心 I C I S 編『I C I S 第四屆國際學術研討會論文集 印刷出版与知識還流——一六世紀以後的東亞』I C I S 刊 二〇一〇）。

(4) Tran Van Giap, *Tim Hieu Kho Sach Han Nom: Ngon Tu Lieu Van Hoc Su Hoc Viet Nam*, Tap I, Ha Noi, Nha Xuat Ban Van Hoa, 1984, p. 135, No. 34 “Dai Nam Thuc Luc Chinh Bien” [大南寔録正編] 1.

(5) 『大南寔録正編』におけるフランスの漢字表記については、拙稿「越南本について——『東洋文庫蔵越南本書目』にみる日本とのかかわり」（『跡見学園女子大学『人文フォーラム』九二〇一・三』参照。第一、第二紀では「富浪沙」、第三紀では「沸曬晒」と表記が異なるのは、地方官からの報告を踏襲したためである。サイゴン条約の国書によってフランスの表記は富浪沙に統一された。（辛亥嗣徳四年十一月）『大南寔録正編』第四紀巻七 慶應義塾大学言語文化研究所版一五 五八三八頁）。

(6) 『中越関係史書目続編（三）流入内地之越籍』『中国東南亜細亜研究会通訊』二〇〇二—一。

(7) 安南は、ベトナムと中国との関係においてベトナムにとって、冊封関係のなかで中国から強要された呼称で容認しがたいものである。嶋尾稔氏は、嗣徳元年（一八四八）に清国の欽州から送られた公文書に「阮朝の公式の国号である『越南』ではなく、前代の国号である「安南」を用いていたという国体に関わる大問題」があったことを指摘している（『阮朝殊本と『大南寔録』』慶應義塾

大学言語文化研究所紀要、四一 二〇一〇）。当時のベトナムにとって安南は「不雅」という語で表現されている。大法については、八尾隆生氏が『大南一統志』（一九一〇年刊）における用法について「筆者はこの『大法国』という言葉に、何かしら慙懃無礼さのニュアンスが込められているような気がしてならない。ヴェトナム戦争当時に北側が韓国軍を、侮蔑感を込めて「大韓」と呼んだように。」（『大南一統志』編纂に関する一考察』『広島東洋史学報』九二〇〇四）と述べている。筆者は、大法は大南に対する正式な国号であり、侮蔑感云々とは異なる問題であると考えられる。大法がフランスを表す常用語である一例として『野史』がある。作者は楊琳（一八五二—一九二〇）に比定され、北圻（トンキン）の一九世紀末の新聞から主に集められた雑文集で、法国とやらんで大法、大法国が使われている（孫遜、鄭克孟、陳益源『越南漢文小説集成』一四 上海古籍出版社 二〇一〇）。ベトナムが自称した国号大南について許文堂氏は、『大南寔録正編』第二紀をあげる。明命帝が国土の南部への拡大を根拠として大明、大清を意識していたことが寔録記事（明命二十年春正月）から知られる。許文堂氏は、一八七四年のサイゴン条約第二款のベトナム皇帝が「自主之権」をもち、フランス皇帝が「幫助」するとう文言に注目する（大富浪沙国大皇帝明知大南国大皇帝係操自主之権非有遵服何国、致大富浪沙国大皇帝自許幫助。「自主之権」は中国の藩属ではないこと、「幫助」は保護国 (Protectorat) にすれすれであることを指摘する。さらに許文堂氏は、翌年一八七五年に清国がフランスの駐清公使に照会した際に「フランスと『交趾国』との和約である」という回答を得たことをあげている。フランスは、冊封体制の中国が承認した越南、ベトナムの自称大南も使わずコーチシナ（交趾）としてベトナムを表記している。これは、ベトナムの国号問題が植民地化にあたってフランスにとって重大であったことを意味する。フランスの敏感さに対して阮朝は、嗣徳一六年（一八六三）冬十月の時点で『大南寔録正編』第四紀はフランスを「浪沙」と記す無頓着さである（『十九世紀清越外交関係の演変』許

文堂主編『越南・中国与台湾關係的転変』中央研究院東南亜区域研究計画 二〇〇一。

- (8) 以下、ルグラン・ド・ラ・リラエの経歴は、Theophile Legrand de la Liraye : cote LH/1562/47 (Missions Françaises de Paris); M. Prevost, R. d'Amat, H. Trihout de Morembert, *Dictionnaire de biographie française*, Fasc. 119, Paris, Letouzey et Ané 1980, p. 1068, s.v. Legrand de la Liraye; A. Brebion, *Livre d'or du Cambodge, de la Cochinchine et de l'Annam 1625-1910 (biographie) et bibliographie*, New York, B. Franklin, 1972 [first published in Saigon, from Schneider, in 1910], p. 23-24, 2448.
- (9) T・E・エンニス 大岩誠訳『印度支那——フランスの政策とその発展』生活社 一九四一。二九〇四八頁。坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史——阮朝嗣徳帝統治下のヴェトナム 一八四七—一八八三』東京大学出版会 一九九一。三二〇五〇頁。
- (10) 一八五三年一〇月から五七年六月までの犠牲者は合計九五人で、コーチシナ四人(内ヨーロッパ人六名)、トンキン五人(内ヨーロッパ人八名)である(D. Lancaster, *The Emancipation of French Indochina*. London, New York, Oxford University Press, 1961, p. 36)
- (11) エンニス前掲書 五二頁。
- (12) 同上 二四五頁。
- (13) *Dévoué aux intérêts de ce pays, il cachait un mérite éclatant, sous une rare modestie* (A. Brebion, 1972, p. 23).
- (14) 原住民問題担当監督官の設置について坪井氏は次のように説明している。「ヴェトナム人に対して絶対少数であるのみならず、フランス側には、まず現地の言語を用いてヴェトナム人と話ができ、かつヴェトナム人を統治できる老練な行政官がいなかった。そこで一八六一年さっそく原住民問題担当局 (Le Service des Affaires indigènes) が設けられ、海軍の外科医や機関科将校など

の多様な諸部隊の士官たちの中から、さらにヴェトナム語、中国語の専門家とみなされるかつての宣教師だった人々の中から、この局の監督官が選ばれた。監督官には、俸給は海軍士官の通常の給料の約三倍、任務が成功した場合には非常に迅速な昇進」という極めて有利な待遇が当局から与えられた。この制度は多くの優れた士官をひきつけ、この中からP・フィヤストル、P・P・レナル (Reinard)、A・ド・ケルガラデックのような外交官、また、ドゥダール・ド・ラグレ (Douart de Lagree)、F・ガルニエのような冒険家が輩出した。監督官は皆若く、二六歳から三四歳であった」(前掲書 六七頁)。

(15) 坪井善明前掲書 八〇〇八五頁。

(16) エンニス前掲書 七八頁。

(17) 同上 九六頁。

(18) 土地無償譲渡(コンセッション concession)とは、フランス領期に未耕地や未登録地をフランス人や対仏協力者にほとんど無償で分与する制度。この結果、開発された西部メコンデルタに大規模な地主が生まれ、米田プランテーションが形成された(桜井由躬雄・桃木至朗編『ベトナムの事典』(同朋舎 一九九九)。コンセッション制度が反仏運動を激化させたことは、小倉貞男参照『物語ヴェトナムの歴史——億人国家のダイナミズム』中央公論社 一九九七 二九一—二九三頁)。

(19) *Dictionnaire de biographie française*, p. 1069; インターネット・サイト *Chro Chronologie Vietnam*, Le siècle de la colonisation française <http://www.clio.fr/CHRONOLOGIE/> *chronologie Vietnam_Le_siecle_de_la_colonisation_francaise.asp* > 二〇一一年五月五日アクセス)。

1862-1879 : Période dite du « gouvernement des amiraux », ceux-ci se trouvant durant cette période investis du gouvernement de la Cochinchine

française. La Marine joue alors un rôle déterminant dans les débuts de la colonie. Dès 1862, c'est autour d'un missionnaire, le père Legrand de La Liraye, responsable d'un Bureau de renseignement sur les coutumes et les institutions indigènes, que se réunissent de jeunes officiers qui apprennent la langue locale, se consacrent à la pacification du pays en luttant contre les pirates et s'efforcent d'administrer le territoire sous autorité française. Ils font fonction d'officiers des affaires indigènes et recrutent des auxiliaires autochtones dont ils contrôlent l'action. À partir de 1873, la Marine établit un collège de stagiaires où ces officiers sont formés à leurs nouvelles fonctions, sous l'autorité du lieutenant de vaisseau Luro, chargé d'un cours «d'administration annamite».

(20) 坪井善明前掲書 八〇頁、六四頁、エニス前掲書 六五頁はフイラストールおよびガルニエについて述べている。一八七三年のガルニエ事件は、黒旗軍の勝利でありアジアにおける白人にたいするアジア人の初めての勝利である。Poire exposition de Saigon. Pavillon de l'histoire. La Cochinchine dans le passé: rétrospective historique organisée par la Société des études indochinoises, *Bulletin de la Société des Études Indochinoises (Saigon)*, XVII, No. 3, 1942, p. 15 には「新しいローチミナ」建設に参画したフイランス人、ストナム人の中心人物が挙げられている。

Enfin, sont évoqués une notable partie des protagonistes de l'immense entreprise [i.e. la construction de la ville de Saigon et de la Cochinchine], les grands serviteurs, Français et Annamites, qui, de leur cœur, ont créé la Cochinchine nouvelle; du côté français, d'Arès, Paulin Vial, Brière de l'Isle, Gougéard, Francis Garnier, Luro, Philastre, Legrand de la Liraye, Janneau, Turc, Piquet, de Champeaux, Rheinhardt, Hermitte, Eyriaud des Vergnes, Thévenet, les frères Denis, Blancsubé; du côté annamite, le doc-

phu Ca, de Hocmon, le lanh binh Tan, de Go-cong, le phu de Cholou, Tran-Ba-lac, Pétrus Truong Vinh-ky, etc. ...

ルクラン・ド・ラ・リラエが「公教育についてのリュエロ、フィラストール、ルグラン・ド・ラ・リラエ師の報告」で述べたなかには、仏山版とつながりそうな一文がある。この報告書で、リュエロは、漢字はエジプトの神聖文字 (hiéroglyphes) のように難解で、教育的な効率が悪いが、クオックグーの普及は遅々として進まないことを指摘する。それに対して、ルクラン・ド・ラ・リラエは、「一民族の文字体系を変えることは一朝にして成るような事業ではなく、教師の質の向上が先決である」と述べる。それに続いて、「プロパガンタと教育のためにはアンナン語と漢語で、各種の良書や翻訳を出版すべきであろう」と述べている。Georges Taboulet, *La Geste française en Indochine: Histoire par les textes de la France en Indochine des origines à 1914*, Tome 1, Paris, Adrien-Maisonneuve, 1955, p. 592-597. 異次元の文字 (漢字) は、官僚としての立身出世に直結していた。フランスが、漢字と儒学とに拠る科擧を廃止することになったのは、一九一九年であった。

(21) E. Cotteau, *Un touriste dans l'Extrême Orient: Japon, Chine, Indochine et Tonkin (4 août 1881-24 janvier 1882)*, Paris, 1889, p. 392.

(22) A. Baudrit, Extraits des registres de délibérations de la Ville de Saigon (Indochine française) 1867-1916, Première partie, *Bulletin de la Société des Études Indochinoises (Saigon)*, Tome X, No. 1-2, 1935, p. 437.

(23) タニエル・ニコ 天野知恵子訳「街路の命名」(P・ノラ編「記憶の場」「三・模索」岩波書店 二〇〇三)。

(24) *Notes historique sur la nation annamite* / par le P. le Grand [i.e. Legrand] de la Liraye. 本書はフランス国立図書館の電子図書サイト Gallica <http://gallica.bnf.fr/> からタウンロード可能。同書は一九四〇年代には、C・マリス氏が「ベトナム史の古典的著作」(楊広咸『安南史』東亜研究所 一九四二)で

- P・ブデ氏は「フランス極東学院のメイキンの『アンナム近代史』に先駆する近代的インドナム史びきる」(P. Boudet, "Les Archives des Empereurs Anam et Histoire Annamite", *Bulletin Des Amis de Vieux Hne*, XXIX^e Année, No. 3, 1942, p. 232)と評価している。また「ウーキンズニヤ」(英文版)は Annam (French proctorate) の参考文献として同書 (Paris, 1866?) を挙げている (二〇一一年五月八日アクセス)。
- (25) 桃木至朗「ベトナムの中国化」(池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社 一九九四)。
- (26) G. Aubaret, *Gia-dinh-thung-chi, Histoire et Description de la Basse Cochinchine (Pays de Gia-dinh)*, Paris, Imprimerie Imperiale, 1863.
- (27) *Dictionnaire de biographie française*, p.1069 : "Legrand de la Liraye fut détaché au tribunal de la justice indigène où il servit, notamment, comme interprète pour l'annamite et le chinois".
- (28) 同書の表紙には、「ルグラン・ド・ラ・リライエ師による レジオンドヌール賞勲士アンナム語および中国語の総督府付通訳官 原住民間題監督官」と刷り込まれている (L'abbé Le Grand de la Liraye, Chevalier de la Légion d'honneur, Interprète du Gouvernement pour l'annamite et le chinois, Inspecteur des affaires indigènes)。現代インドナムでの評価は、レ・タン・コイ氏が「Les premiers [dictionnaires] ont été dus à des missionnaires : Tabert (1838), Legrand de la Liraye (1877), Casper (1877), avant Truong Vinh Ky et Huynh Tinh Cua (1895), puis encore un missionnaire, Génibrel (1898) など」(Le Thanh Khoi, *Histoire et Anthologie de la Littérature vietnamienne des origines à nos jours*, Paris, Les Indes savantes, 2008, p. 439)。
- (29) 後藤均平「徴姉妹の反乱」『ベトナム救国抗争史——ベトナム・中国・日本』新人物往来社 一九七五。
- (30) Laurent Dardignes, *L'Orientalisme français en pays d'Annam 1862-1939*, Paris, Les Indes Savantes, 2005, p. 110 : "le cas du proverbe Phap vua thua le lang".
- (31) S. Lévi, *Indochine : Exposition Coloniale Internationale de Paris*, Paris, 1931, p. 196.
- (32) 村松嘉津訳『仏印文化概説』興風館 一九四三 三五九頁。
- (33) 「図書館」の原語は *bibliothèque*。原語には建物としての「図書館」の意味と同時に、「蔵書」の意味もある。ここではむしろ「蔵書」の意味に解しておきたい。
- (34) 西英昭氏は、日本の治外法権撤廃問題からんで、新領土台湾が条約に言う「非文明的」台湾にすぐ実施するのは困難である」という議論が発生したことを指摘する (『台湾私法』の成立過程——テキストの層位的分析を中心に』九州大学出版会 二〇〇九 二六頁)。「文明的」と「非文明的」という対比について宮嶋博史氏は、中国の明清時代の土地所有のあり方を例にあげて、「実態としての土地ではなく営業収益の対象としての土地(業)」は「債権的意識」とも通底しており、ヨーロッパ近代の「所有」とは異なる点を重視している。「業」については『台湾私法』から例が引かれている (『儒教的近代としての東アジア』『近世』『岩波講座 東アジア近現代通史』一 二〇一〇 六九〜七〇頁)。
- (35) P・ラングレ氏は、黎貴惇『見聞小録』(一七七七)によって黎朝における印刷は、仏教僧侶を除いて皇帝の許可が必要であったこと、木版印刷は経費が嵩むことを指摘する (P. Langlet, "La mémoire de l'État national vietnamien des origines à la fin de la Dynastie Le (1789)", *Annales des Hamburger Vietnamistik*, 1, 2005)。張秀民氏はベトナムの書厄の多さに注意する (『中越関係書目』『中国東南亜細亜研究会通訊』一九九一 二一・三)。
- (36) グエン・ティ・オワイン氏は、漢喃研究院蔵書とフランス植民地支配との関

- 係を分析している (Nguyen Thi Oanh 清水政明訳「漢字・字喃研究院所蔵文献——現状と課題」『文学』二〇〇五 一一・一二)。
- (37) 藤原貞明『オリエンタリストの憂鬱』めこん 二〇〇八 三四二頁。

